
じゃあ明日の三時、あの茂みの裏で【百合注意】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゃあ明日の三時、あの茂みの裏で【百合注意】

【Nコード】

N7063R

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

【あらすじ】

何となく百合を作ってみました。

風景描写の練習。

(前書き)

風景描写と比喩の練習に作りました。

あと別に茂みだからと言って卑猥な意味はありません。ご了承ください。

窓の外には黄色く色づいた木が遠くにある。

とある少女はただぼう、っと眺めていた。

ふと、気付くと太陽がかなり傾きかけてきた頃であった。どうやら一時間近く外を眺めていたらしい。

いくら放課後とはいえ、これ以上ここにいるのは迷惑だろう。と少女は考えた。

ふと立ち上がって少女はまたぼう、っとする。

少女がいるその空間は静かで、ただ静かで、何事もないように思える。

だけど、少女の耳にかすかな泣き声が聞こえた。

必死で押し殺しながら、か細い声で泣いていた。

辺りを見渡すと、こっそり泣きながら机を拭くもう一人の少女の姿があった。

「どうかしたの？ そんなに泣きながら机なんか拭いて」

不思議に思った泣いていない方の少女　咲坂桃妃さかたももが声を掛けた。

もう片方の少女は黙って机を拭き続けるだけで、返事は帰ってこなかった。

「っっっっっっっっっ」

「っっっっっっっっっ」

どのくらい経ったであろうか。桃妃はなんとなく考えていた。

実際は五分と経ってはいないのだが、無音に響く机を拭く音と、暗くよどんで重い空気かきの所為で、少女達はかなり長く感じていた。

桃妃はよし、と小さく呟つぶやいて、少女の顔を覗き込んだ。

「どうしたのかな？ 日津真穂ひつまほさん。さつきから私を無視しているけど、私の声、聞こえなかった？ それとも……」

「ひ、ひいっ」

真穂と呼ばれた少女は言葉を聞くなり怖じ気づき、後ろに後ずさった。振り返ったおかげで見えた顔は整っているが、涙と恐怖で台無しである。

また、少しの間沈黙が訪れる。一方の少女は恐怖に襲われ、一方の少女は違和感を感じながら。

桃妃は少しの逡巡の後、優しく声を掛けた。

「もしかしてあなたのその机……、『みんな』にやられたの？ だとしたら、同じクラスとは思えないわね……、こんなに……」
必死で気に障らないような言葉を紡ぐ桃妃であった。

だが、真穂はもつと目に涙を溜めて、

「放っておいてよ！ どうせお高い所から私を見下ろしてるんですよ！ そんな同情は惨めなだけ、やめて！」

と叫んで、座り込み泣き出してしまった。

あー、やつちやったな！。と桃妃は気まずそうに窓から外を見る。夕日があと少しで沈むあたりであった。

わしゃわしゃと自分の長い髪を掻き回しながら、桃妃は真穂が拭いていた机に近寄ってぞうきんを取る。

不思議そうに見る真穂をよそに、机を「ごしごし」とぞうきんで拭き始める。

「まあ、泣かせちゃったお詫びに、私も手伝ってあげるよ。さあ、日が沈むまでに終わらせよ！」

「そ、そんなの……、悪いです」

「いやいや、私だって別に暇だし、それに同情だけならやめてって言ったのあなたでしょ？」

「あ、え、そうだけど……」

「よし、さっさと終わらせないと、日が沈んじゃうよー！」

桃妃はそれだけ言って、真穂と一緒にぞうきんで机をこする。

「」

「」

あつという間に終わった。油性なのでぞうきんでは敵わないと悟った桃妃が爪ヤスリを持ち出したため机は多少削れたものの、こつとして太陽が沈む前に帰れたのだ。

最後にはごしごしがガリガリに変わっていたが。

今は二人並んで自転車をこいでいる。だがどちらも話さない。お互い空気を壊さないでいようとしているかのようには。

だが、お互い心に引っかけかかっている事があつたようで、明るい表情とは言い難い。

最初に口を開いたのは真穂であつた。

「なんで、私を助けてくれたの？ 私に関つてると『みんな』から

……」

「真穂は私が嫌いかな？」

「え……？ べ、別に嫌いじゃありませんけど、迷惑掛けたら……、

あの……」

「あなたが私を嫌う訳じゃないんでしょ？ なら私はそれでいい」「で、でも……」

急に桃妃が自転車を寄せてくる。驚きはしたものの真穂はそのままこいでいたら、急に頭に柔らかい感触がした。

横を見ると、桃妃が片手で真穂の頭を撫でていた。さつきとは似ても似つかないほどとても優しい顔で。

真穂は焦って

「な、な、何してるんですか！」「

すると桃妃はちよつと悲しそうに

「嫌？」

と首をかしげた。

「べ、べつに嫌じゃないですけど……」

「ならいいじゃない。……本当、可愛いのね」

こつ言つてまた、撫で始める。

ずつとずつと、真穂が家に帰るまでずつと桃妃は一緒にいてくれた。

「今日はありがとうございました」

「じゃ、また明日学校でね」

真穂は去っていく桃妃の背中を見つめながら、少し愛おしいような寂しいような衝動に駆られた。

そしてまだ、頭には手の感触が残っていた……。

真穂は家の中に入ろうとした。

その時、一筋の涙が流れ落ちた。それがうれし涙か、悲し涙かは分からない。

とにかく親に見つかってはまずい、と真穂は袖で拭うのであった。
ごしごしごしごし

あの日から何日経ったであろうか。

彼女たちはとても仲良く過ごした。

だが、彼女たちは別れなければならぬ。

なぜなら、彼女たちには卒業が待ち受けているのだから。

ごしごしごしごし

桃妃は目をこすった。寝起きの頭をわしゃわしゃと整えながら朝ご飯を家族の分も作る。

ハミガキや色々を済ませ、いざ時計を見ると遅刻寸前である。

カバンを手に取り、早い早さで家を出て行った。

卒業まであと2日、彼女はこれまでの無遅刻無欠席記録を失いたくない一心で自転車をこいでいる。

やはり人の想う力は凄いというか、火事場の馬鹿力とでも言うか、彼女はなぜか五分前に到着した。

そこまで熱くなる事でもなかったかな。と軽く思いながら、教室まで足を運ぶ。

廊下でぱったりと会ったのは昔の友達。真穂が『みんな』と呼んでいた中の一人。

良くいる群衆の中の一人。桃妃が毛嫌いしている内の一人であっ

た。

「ねえねえ、卒業前に何かしない？ 明日にカラオケとか？ みんなで話してただけだし、一応、桃妃も来るよね？」

桃妃が真穂と関わりだした時から、桃妃との関係が崩れるのを恐れて、あえて双方は関わり合わなかったが、

今回は最後まで言う意味で誘われたのだろう。だが彼女には計画があった。

「ごめん、パス」

「……ツチ、ノリ悪いなあ」

だがそれ以上は相手も関わってこなかった。

桃妃はのほほんとした表情で机の上にカバンを置くと、席に座っていた真穂が近づいてきた。

「あ、桃妃！ 明日、どこか行きませんか？」

真穂が来るなり、桃妃は嫌そうな顔をして、

「話しかけないで」

と、突き放すかのように淡々と述べた。

「真穂さあ、ずっととうじうじしてて、見るだけでうざったいんだよね。もう私に関わらないでくれる？ この際言っけどずっと我慢してきた。ウザい。二度と関わらないで。まあどうせ、卒業したら会えなくなるんだろっけどね」

桃妃は淡々と、感情を全く外に出さずに吐き捨てた。

だが真穂は突然、態度が変わった事に戸惑いを覚えている。

そんな真穂を放っておいて、勝手に桃妃はその場を去っていく…

…。

その時、真穂は自分が捨てられた子犬になったように錯覚した。

「嘘……ですよね？」

真穂は自分に言い聞かせるように言ったが、それとは裏腹に涙はあふれ出てくる。

立ち止まったらま、真穂は涙を拭いた。

じじじじじじじ

「じじじじじじじじ」

卒業式当日、真穂はいつものベッドの上で目を覚ました。

お気に入りのぬいぐるみをゆっくり撫でてから、彼女の一日は始まる。

今日はやっと卒業式の日。ここまでやっとこれた。あとは進学して、目を付けられないようこっそりと生活するだけだ。

お母さんの分の朝食を作って、さっさと身支度を調べて、学校へ行く。

いつもなら通りたくないこの道も、今日は足取りが軽い。

真穂は一つだけ、何か引つかかると感じていた。

だけど、結局教室の喧噪の中に紛れるのであった……。

真穂が教室にはいると、いつもとは一転、いきなり複数の女子に話しかけられた。

「やつほ〜、真穂。今日打ち上げ真穂も来る？ 最後つくらい羽目外そーよ！」

「あ、そだ、先生への寄せ書き真穂書いてなかったよね。書いて書いて」

「そうそう、もう桃妃には近づかない方がよいよ。あいつ、最後になつて本性現しやがった」

「私、前々からあいつは何かあるって思ってたのよね〜」
色々な声が飛び交う中、真穂は一人、机にカバンを置いてきよる

きよると何かを探すような仕草をした。

「どしたの？ 真穂。なんか忘れ物でもした？」

「ん？ ううん、トイレ……」

「あ、そ」

軽く受け流された真穂は、廊下に出るとまた、何かを探すような仕草をした。

ふと、真穂は思いついたようで、窓から中庭を見下ろした。

そこには、こっそり茂みの裏にしゃがんでいる人影があった。

真穂は、急に意を決して走り出した。
それは普段の運動音痴の真穂からは考えつかないくらいの早さである。

たどり着くと、しゃがんでいたのは桃妃だった。

「コツチ来ないで。この前関わらないでって言ったの忘れてた？」

「ええ……と、卒業する前に、謝っておきたくて……」

「何を？ 謝っても何にもならないのに、何で？」

「わ、私の気持ち……伝えたいから！」

急な大声に桃妃は驚き、目を見開いた。

「あの日、一緒に机を拭いてくれた。その時から好きでした……」。

捨てられても、まだ桃妃が忘れられないんです。でも、やっぱり無理してたんですよ。すみません、迷惑掛けちゃいましたね。それじゃ」

そう言つて真穂は桃妃に背を向け去つた、その時。

「ちよつと待つて」

そう言う桃妃の目には、涙が溜まっていた。

「ダメね、私。最後の最後に情に流されちゃうなんて。もうこうなつたら話すしかないか」

「……へ？」

「ごめんね、今までののは全部嘘、嘘っぱちな。あいつらと真穂を結びつけるために、ずっと前から積み立てて来たんだけどねえ……、最後の最後にミスるなんて、私らしくないよね？」

桃妃は色々な感情が入り交じつて、高笑いをした。

「なんで……？」

「前にも似たような事言わなかったっけ？ 私はあなた以外の人間なんてどうでも良い。自分すらも。って」

その瞬間、二人の間を春風が通り抜ける。

桃妃は軽く微笑み、付け加えた。

「だから、あなたをみんなに認めさせたかったのよね」

「わ……私も、あなた以外はどうでもよかったのに」

「え？」

今度はきよとんとした顔で桃妃は言った。

一瞬、時が止まったかのように何も聞こえなくなった。

そして真穂は、一度深い深呼吸の後、はつきりと言った。

「私も、あなたと同じです。他の人間なんかどうでも良いんです」

「そそ、それさつきもいつてたじゃない!? べ、別に今更もう一

度言う必要は……」

桃妃は急に顔が紅潮し、見るからに動揺しだした。

「桃妃、可愛いんですね。もっと言っておげましょうか？ 大好き

って」

「ちよ、やめてよ！ 恥ずかしいじゃない！ そ、卒業式始まつち

やうよー！」

と桃妃が言うと、急に真穂は表情を変えた。

「そうですね……、卒業したらもう会えなくなっちゃいますよね

……」

茂みがかさ、と寂しそうに揺れる。

桃妃は真穂の胸に手を当てた。

頬を朱く染める真穂を見て、桃妃は口を開く。

「んじやさ、私がない間、ここに私がいると思って。んで、耐え

られなくなったらメールでも電話でも、何でもして」

「はい」

「じゃ、教室行こっか。別々にね」

そう言っつて真穂が歩き出した。真穂はしばらく普通に歩いていた

が、しばらくすると急にポケットをこそごと探り出し、そのまま

歩いていった。

桃妃も歩き出そうとしたその時、不意に携帯の振動を感じた。

携帯を開き、メールを見た桃妃はしょうがない娘ね。と呟き、か

たかたと返信を打ち始めた。

桃妃は「じゃあ明日の三時、あの茂みの裏で」とだけ書いて返信したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7063r/>

じゃあ明日の三時、あの茂みの裏で【百合注意】

2011年3月18日11時55分発行